

ほなひ歴史通信

第46号
2008. 3. 1

『ひだまりの茅葺き民家』に学ぶ

昨年十一月、常陸大宮市在住の写真家柳下征史さんが八溝文化社から刊行された写真集である。副題に、「茨城に見る日本の原風景」とある。茨城県内の道なら、道路整備を担当するなどの職員より知ってますよ、とおっしゃる柳下さん。四十年にわたって県内をくまなく歩かれ、茅葺き民家を取り続けた、その集大成版である。二百五十四枚の貴重な写真が収められている。

一ページ、そしてまた一ページ、ページを繰るごとに四季折々の風情をまとった茅葺き民家が登場する。住んだことはないが、かやぶき屋根が珍しくない山村で育った筆者にとっては、しばし郷愁の世界にひたることのできる心地よいひとときであった。白い花を咲かせたソバが写っている、ねぎ坊主が写っている、黄金色に実った稲穂が写っている、そうした人の手がきちんと入った田んぼや畑と組み合わせられた茅葺き民家の作品群に、また茅葺き屋根の軒下に干してあるつるし柿、玄關脇の白菜、風をはらんで泳ぐ鯉のぼり等々、暮らしの息吹がにじみ出てくるような作品にとくに心引かれた。

この写真集には、三十人の方々の寄稿文も掲載されている。その顔ぶれは多彩である。茅葺き民家が失われていくことへの意

味、少なくなりつつある茅葺き職人のつぶやき、古いものを維持することは大切だがしかし容易ではないという実際に住んでいる方の感想等々、エッセーの内容も多様である。写真を見、エッセーを読む。郷愁の世界にひたつてばかりいられないとの思いに駆られる。そんな、問題提起の書にもなっているのである。

そうした折、ある書物に出会った。NHKラジオのテキスト『風景からの町づくり』（NHK出版）である。著者の中村良夫さんは、冒頭の一節で次のように述べる。

「もはやモデルがない、と言われるこれからの日本のかかえる課題の一つが、都市や国土の風景の問題ではないでしょうか。／たしかに、明治以来の日本がお手本としてきた、西欧都市の華麗な姿や清楚な田園の風景には心を打たれますが、それは国家の統治機構や工場の制度と違って、民族の歴史や風土が育てた生活感情の結晶ですから、おいそれと模倣しようとしてできるはずはありません。だからこそ日本は、一心不乱に西欧のあとを追って国家の近代化には成功しながらも、都市の近代化だけはどうにも思いのままにできず、したがってその風景も破れ障子のようになってしまう」

効率的な生産活動を最優先し、市民生活や文化をなおざりにして「風景」を育ててこなかった日本社会への痛烈な批判がうかがえる。

県内を丹念に歩き、茅葺き民家を写真記録に残すという柳下さんの営為には、中村さんの問題意識と通底するものがあるように思えてならない。農村景観をこのままにしておいていいのか、農村文化が消えていくのを座視していいのか。それらの問いが、少なくなりつつある茅葺き民家を通して我々読者に投げかけられている。問いは重い。この写真集の一読をお薦めするのである。

（齋藤）

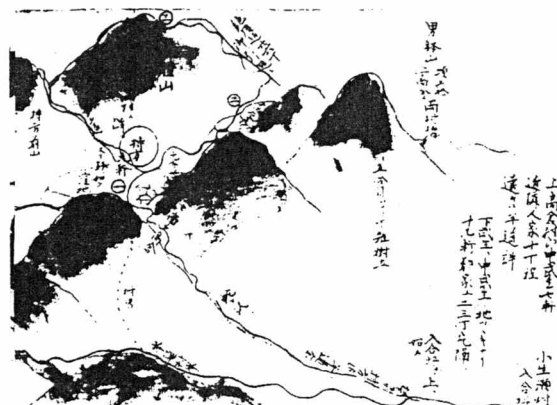
男体山の青雲石

安藤 政蔵

昨年（二〇〇二年）の十一月、袋田のホテルでの懇親会で、黒沢中学生の八溝石研究の情報を得たが、その際、もう一つ別に石の話題をもらった。提供してくれたのは、大子町下野宮に住んでいる菊池先生である。

菊池先生から「安藤先生、青雲石をご存じですか」と聞かれ、私は、知らないと答えた。「前に誰かに聞いたのですが、江戸時代の末期の加藤寛齋の書物に、男体山の青雲石が記されていて、この石を持つていると縁起がいい、というんです。どんな石なんでしょうね」と、重ねて問われた。

私は縁起がいい石とは、ひよつとすると陰陽石の陽石のことではないかと思つた。石がでた山が、なんと男体山だからである。私の推測を菊池先生に話すと、「なるほど、なるほど」とうなずいてくれた。だが、



加藤寛齋画、男体山『常陸国北郡里間数之記』

これは全くの推測でしかないのです。後日よく調べてお知らせするから、と先生と約束した。それから数日後、書棚の茨城県大百科事典で加藤寛齋について調べた。加藤寛齋（生年不詳〜一八六六）、水戸藩太田郡奉行所手代で博文強識、著作は『常陸国北郡里間数之記』他、二十数編を著せる。私はこの『常陸国北郡里間数之記』に、青雲石が

記入されているのではないかと思ひ、市の図書館に行き、郷土資料コーナーで同書の復刻版を見つけ出した。この『常陸国北郡里間数之記』の北郡とは、水戸藩領北部一三〇カ村のこと、奉行所が太田におかれた。

『里間数之記』（三〇一枚）は、村境から村境までの間数と道路を中心に山や川、神社仏閣、祭礼行事、名所旧跡にまつわる俚諺や伝説、村落の竹まい等が、文と図によって克明に記されている。男体山の記事は次の通りである。

「一此山ノ麓溪谷ヨリ陽石ヲ出ス一名昇進石又青雲石トモコノ石ヲ得ルモノ青雲ヲ司ルトナリ寛齋積年はヲ得ン事思毎年辰ノ口堰元詰中浜ノ真砂ノ数尽サレハ得ニ難カラヤト毎年心ヲ用ユルニ未其事ナシ大雨激流アル時久慈川ニ流出ルコト有トソイヌル頃下小川邑里正九次衛門ナルモノ予ニ語テ曰男体山下溪谷ヨリ陽石ヲ出其姿恰モ如真物筋骨肉絡生ルニ似タリ下小川農夫両三人依沢而得シモノアリト云此山陽因アルヲ以テ男体ノ号アリト覚シ同僚鱸重固予トトモニ大門邑ニ行重固開運ノ時至ルニヤ道路ノ側ニテ陽石一箇ヲ護果而此年転役僥倖アリ当時重固昇進シテ至吟味役」

やはり青雲石は、昇進石と呼ばれる陽石だった。そして陽石は、男体山の名称と関わりがあると記載されており、推測通りなので驚いている。

寛齋は、陽石を探したが見つけれなかった。同僚の鱸重固は石を入手、昇進石は靈験あらたかだ、吟味役に昇進した。寛齋は手代に止まったが、著作に励み、後世に有益な書物を遺したのであるから実に立派である。

当時、開運を望む人達に珍重された青雲石は、今でもどこかでご利益を与えているのか、消息を知りたいものである。

（常陸太田市在住）

稻荷神社の棟札(一)

大子町初原辰口の稻荷神社(祠)

初原辰口の稻荷神社の棟札に、社殿が造営されたのは天保六年(一八三五)未歳とあり、今からおよそ一七〇年前である。その造営時の棟札に梵字(バン)、正一位稻荷大明神などの文字が書き記されている。

また、稻荷神社の建物などの周りに、他の神社では見られない「正一位稻荷大明神」と書き記された赤い旗や幟が立てられている。その由来は、稻荷神社の総本山である伏見稻荷大社にある。

伏見稻荷大社の創建は、和銅四年(七一)二月、今からおよそ一三〇〇年前である。京都伏見区稻荷山三方峰に顕現した神を、深草(ふかぐさ)一帯を開拓した渡来系氏族秦氏の祖伊呂具秦(いはろぐも)公が勅命により、祀ったところ、五穀大いに実り天下の百姓は豊かになったと伝えられ、それ以来秦氏族が奉祭してきた。そのため神階は、天慶五年(九四二)正一位に上がり、俗に赤旗や幟に描かれる正一位稻荷大明神の文字はこれに由来するという。正一位とあるのは、神階が神社の最高位であり、稻荷神社の異称でもある。

次の棟札は弘化四年(一八四七)二月の祭祀の時のものである。棟札には梵字(イ)は見られなくなり、御祓いをとりにもっているのは、導師別当宝蔵院ではなく祠宜弓野但馬守である。

①

天下泰平	祠宜
奉遷宮正一位稻荷大明神御祓	弓野但馬守
五穀成就	

安政七年(一八六〇)の棟札②には、別当宝蔵院とある。

②

天下泰平	別当
奉遷宮正一位稻荷大明神守護	
国家安穩	宝蔵院

明治二十七年(一八九四)の棟札③には、別当宝蔵院という文字は見られず仏教色を排除した棟札に変わっている。

③

稻著魂命(うかのみたまのみこと)	氏子安全
奉遷宮正一位稻荷神社	折攸
保食命(うかのみたまのみこと)	五穀成就

日本は一千数百年にわたり、神と仏が密接に融合した「神仏習合」というぬきさがたい関係にあった。明治維新によって成立した新政府は、祭政一致を前面に掲げて明治元年(一八六八)神仏分離令を布告し、仏教勢力の一掃をはかった。さらに政府は、神社や神職を支配していた社僧や別当に還俗命令を出したので社僧や別当は神職に鞍替えした。

明治十五年(一八八二)には、宗教分離と宗教の自由という立場から、神官は祭祀以外の宗教活動には関与しないことが決定され、さらに神社は国家の宗祀として、内務省が管轄することとなった。長い神仏習合の時代を経てきた神社は、国家体制と結びつき、帝国憲法や教育勅語の精神とあいまって国民に深く浸透することになった。しかし、太平洋戦争の敗戦により、昭和二十年(一九四五)連合軍総司令部(GHQ)は、日本の民主化を進めるために国家と神道を分離する「神道指令」を出し、国家と神道の完全な分離を実施したのである。(小澤)

【昭和の初め頃の農家 五】 米づくりー 田植え

田んぼに米を作る仕事は、農家の一番大事な仕事である。米づくりは先ず田の土づくりが第一である。耕したり肥料を入れたり、堀普請や堰普請など田植え前の仕事は多い。稲刈りが終わった田んぼは先ず「田うない」をする。秋の内に「まんう」で起こしておけば良いのだが、春先になる事もある。更に田植え近くになって小切りと呼ぶ土を細かく砕く作業をする。こうしておくと代かきが楽になる。春は田植えの準備の外に麦刈り、お茶摘み、こんにやく植えなど猫の手も借りたくない忙いので、子供達も手伝わされる。田うないも小切りもまんうを使うので手にまめができて痛くなるつらい仕事だった。

一方別の水田には水を入れて「苗作り」が始まる。短冊形に区切った苗床に籾を蒔き水を入れる。やがて芽が出て緑色の短冊の苗代が方々で見られる様になる。

六月になると田に水を引き「田かき(代かき)」が始まる。代かきは馬を使った。馬を誘導する「はなどり」と馬が引くマンガ(馬鋏)を扱う「マンガどり」が付き、馬と人間二人の協力である。水を入れた泥田をぐるぐる歩くので馬も人間も泥だらけになる。さんざん歩き回って柔らかくなるまで続ける。こうして田んぼを一枚一枚丁寧に歩いて行く。

田植えの前日には「苗取り」をする。苗代の苗を両手でむしり取る様にする、更に土をきれいに洗い落とし一握りくらいに藁で束ねる。手早にやっているが苗を折らない様に気を付けている。こうして集まった苗は田んぼへ運ぶ。苗を入れた苗籠を天秤で担いで持っていくのだが、子供には難しいの

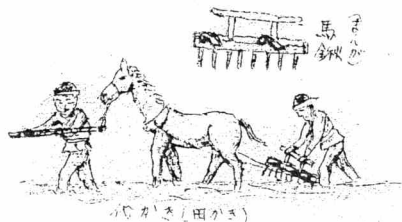
で、しよい籠(背負い籠)で運ぶ。

田んぼでは「田植え」が始まっている。田んぼには既に苗が適当に投げ入れてある。子供達は苗を田んぼに投げ入れる役だ。田のクロ(畦)にいて苗が無くなりそうな人の所へ投げてやる。この仕事を「苗ぶち」という。あまり近くへ投げると泥がはねて嫌われる。

普通は綱を引いて植えるなどはないで、植える人が適当に間隔を取って植える。その方が速いのだ。片方の手に苗を持ち、もう一方の手で三、四本の苗を取って植える。右手で植えている内に左手で次の苗を繰り出している。植えながら後ずさりするので、遅い人は後の方を隣の人に植えられてしまつて、出られなくなつてしまふ。「田の神様になつた」からかわれる事になる。

こんな冗談や世間話、時には上手な人が田植え歌などを歌つてやっているのがめてやるので疲れる。これが毎日の様に続くから、腰が痛くなりつらい仕事だ。この頃は麦刈りもこんにやく植えも腰を曲げてやる仕事が多いので益々腰が痛くなる。

農家の仕事は朝が早いので、九時頃はお休みとなる。家から運んできたお茶に漬け物、おにぎり、赤飯、お煮染めなどを食べて休む、子供達も一緒に食べる。話も弾んで楽しいひとときだ。昼食は一時頃、同じようにご飯を食べて、せいぜい三、四〇分もするとまた午後の仕事になる。午後にも一休み、夕日が沈む頃やつと一日の仕事が終わる。



【昭和の初め頃の農家 五】米つくり二 働く人

田植えが終わった田んぼは絶えず水を切らさない様に気を配らなければならない。昔の人が苦勞して堰や水路を造り水を確保してきた。今でもそれを守って水田に利用している。

堰は川から水を取り入れるためのものである。まず川の兩岸に丸太でやぐらを組み、沢山の石を入れて堰の基礎にする。その間に太い丸太を渡しこれを何段か重ね必要な高さを決める。更に木の枝や竹などを重ね、その上に砂利や小石を載せて水を堰き止める。ある程度は漏るが、大部分は堰き止められ水位が高くなると、やがて用水路に流れるようになる。

用水路は秋から冬中使わないので、かなり痛んでいる。春になると「堰普請」を毎年行うのと同じように、利用者全員で「堀普請」をやる。崩れた所、穴があいて水が漏る所などで丹念に修理する。最近はU字溝になって、いるところが多いが、昔は土を掘り下げただけの水路だったから、毎年修理が必要になるのである。

さて、田んぼでは稲がすくすくと伸び、一面に青々とした景色が見られる様になる。農村の一番美しい季節だ。ところが農家の人にとっては、又つらい仕事が続っている。稲が伸びると同時に他の草も伸びる。草を取らないと稲の生育が悪くなるので、六月から八月にかけて「田の草取り」をやる。腰を曲げて稲の株の間の草をていねいにむしり取る。軟らかい泥だから取るのは簡単だが、腰が痛くなり暑さも強く汗だくになる。その上稲の葉で目をつく事もあり油断できない。田の草取りは一番草、二番草、三番草とていねいな農家は三回取る。しかし三番草の頃は夏になり、暑いので背中にミ

ヨウガの葉などを載せて日射しを防いだりする。その上顔や目が葉に触れてつらいので、二番草で止めてしまいう事もある。田の害虫の二化めい虫は小学生も苗代へ行つて葉についた卵や蛾を取つてご褒美に半紙を貰つたりした。

今は除草剤や防虫剤で簡単にすませてしまふが、昔は容易ではなかつた。肥料も昔は堆肥だけで、背負つて運んだからこれも重労働だつた。

この忙しい農家の仕事は女の人の働きで支えられていると言へる。田植えとか稲刈りの時の母親はたいへんだ。

朝は三時頃には起き出して、その日の朝飯、お休みやお昼の食べ物の準備をし、子供達の学校の弁当まで用意する。

朝飯をみんな食べて食べると、子供達は学校へ、大人は田んぼへ出かける。女の人は背負い籠にお休みやお昼の食べ物、そのほか茶碗や湯飲みなども入れて背負つて一緒に出かける。

田んぼの仕事はみんなと同じようにやつて、お休みやお昼のときはみんなに配つたり片付けたり忙しい。お茶はやかんに入れて持つて行くのだがさめてしまうので、学校が休みのときは、子供達が家からお休みに合わせて持つて行く。田んぼで火をおこして沸かす事もある。(その頃は農繁期休業があつて、高学年は一週間くらい学校が休みになつた。)

仕事が終わつて家に帰ると夕食の準備をする。その間男性は馬を洗つたり、飼い葉を与えたりして風呂に入る。夕食後も母親は後かたづけや明日の食べ物の準備をする。そのほか子供の着物を繕つたり、洗濯をする事もある。(その頃洗濯機はなかつた。)やつと風呂に入るのは夜中になつてしまふ。明日もまた朝早く起きなければならず、農繁期は母親にとつて本当に寝る間もないくらい忙しかつた。

(石井)

国民文化祭に向けて「俳句教室・俳句会」を開催

平成二十年十一月一日から九日まで茨城県で開催される、第二十三回国民文化祭いばらき2008をご存知ですか。この大会は、昭和六十一年に東京都で開催されて以来、各県持ち回りで開催されている大会です。

大子町においては、十一月二日(日)茶の里公園を会場に「広域文化交流事業」を、そして十一月八日(土)大子町リフレシユセンターを会場に、文芸祭「俳句」を開催いたします。

この大会に向けて現在準備を進めています。町内の盛り上がりを図るため、小・中学生対象に、奥久慈俳句連盟中島正夫会長以下、会員の皆さんが講師となつて「俳句教室」を一月に各学校を会場に開催しました。それぞれの学年に合った資料や絵によつて、楽しい「俳句教室」となりました。教室で行つた俳句の作り方の一部を紹介します。

一、俳句の約束事

○ 五・七・五の十七おんであること

○ 季節を表す言葉の「季語」を入れること

「冬の季語」の例 ・ 寒い ・ しも ・ もち ・ はばたん
・ みかん ・ こたつなどです

二、俳句はどんなことを詠むのか

感動したことを詠む

○ はつと驚いたこと ○ ふと感じたこと

○ 発見したこと ○ ふと思つたこと

皆さんも参考にしつて一句詠んでみてはいかがですか。

また、この教室に合わせて「俳句会」を行いました。小学生の部には九〇一句、中学生の部には五三九句が投句され、講師となつた先生方が選者となつて、特選、入選、奨励の各賞が選

出されましたが、その中の特選の一部を紹介します。

「中学生の部」

◎ 木造の校舎に映える雪景色

◎ 初めてのスキーゆつくり滑りだす 黒沢中学校 三年 菊池 貴洋

◎ 「小学生の部」 生瀬中学校 一年 小林真奈美

◎ でぞめ式放水の中にじをみる

◎ さむいあさうまれた子うしかわいいな 上小川小学校 五年 渡辺 麻衣

◎ 黒沢小学校 二年 齋藤 智則

選考された講師の先生も、そのレベルの高さに驚いたようです。また、投句された作品の中には思わず笑つてしまう俳句もありました。今回の俳句会を契機として、秋に開催する国民文化祭が、全国の俳句愛好者から数多く投句され、盛大な大会になるべく広報宣伝に努める所存であります。(鈴木)

編集人 斎藤 典生(茨城大学人文学部)

野内 正美(茨城県立大子清流高校)

石井喜志夫(元 教員)

小澤 閑彦(元 教員)

鈴木 徹(大子町教育委員会)

編集発行 遊史の会

大子町立中央公民館歴史資料室 気付

久慈郡大子町池田二六六九番地

〒319-3551 ㊚0295(72) 2627